

2050年研究会 ～未来デザインフォーラム～(第5回)

講演要旨

日時：平成30年10月25日(木) 14時00分～16時00分

場所：合同庁舎2号館低層棟1階 共用会議室3A,3B

講師：田中 幹夫 氏 (富山県南砺市長)

テーマ：南砺市の取組みと展望 ～一流の田舎を目指して～

1. 南砺市について

- 富山県南砺市は、平成16年11月1日に、4町4村(旧城端町、旧井波町、旧福野町、旧福光町、旧平村、旧上平村、旧利賀村、旧井口村)が合併して誕生した。面積は琵琶湖とほぼ同じ大きさで約668平方キロメートル、人口は合併時の約59,000人から減少して現在は約51,000人である。
- 富山県、石川県、福井県、岐阜県にまたがる「霊峰白山」周辺がユネスコエコパークとして登録されているほか、「五箇山の合掌造り集落」はユネスコ世界遺産に、「城端曳山行事」は「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録されている。また、旧福野町の「福野夜高祭」が日本ユネスコ協会のプロジェクト未来遺産として登録されており、「木彫刻のまち井波」は文化庁の日本遺産に認定されている。
- その他にも、日本最大規模の「ワールドミュージック・フェスティバル」や伝統的な「五箇山民謡」、昔ながらの製法で作られる「富山干柿」など、南砺市には世界に誇れる遺産や地域資源が数多く存在する。
- 観光面では、平成24年に、金沢、五箇山、白川郷、高山において、「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」に3つ星で紹介されている観光地を結ぶ「北陸飛騨3つ星街道」がスタートし、その後国宝「松本城」をエリアに加えて「北陸飛騨信州3つ星街道」とし、5自治体を中心となって連携しながら広域観光の魅力を発信している。
- 南砺市の観光客入込数は、平成20年に東海北陸自動車道が全線開通した際に大きく増加した後、一時的に低迷した時期もあったが、平成27年の北陸新幹線金沢開業後にインバウンドも含めて大幅に増加し、その後も概ね増加傾向にある。五箇山地域への入込客数の増加が一段落しているため、少し注力する必要があると考えている。

2. 南砺市の取組みと展望

2.1 南砺市のまちづくり

- 南砺市のまちづくりにおける大黒柱は「結い」と「土徳」である。「結い」とは、おかげさま、お互いさまといった相互扶助の仕組みであり、「土徳」とは、利他、もったいないといった感謝の心を大切にする精神風土である。
- 南砺市は4町4村が合併したため様々な施設が重複しており、維持管理等のコストがかかる。類似施設が複数あれば利用率が低くなるため、地域毎のゾーニングを行い局部的には集約をしていく必要があると考えている。
- 特に庁舎は、合併時に「分庁舎方式」を採用したため、現在、福光、福野、城端、井波の4つに分かれているが、行政事務の効率化や市民の利便性、災害等緊急時の対応等の観点から、庁舎機能の再編について市民や市議会と議論を重ねてきた結果、福光庁舎に一本化する方向性がまとまりつつある。
- 庁舎再編を機に、「まちづくり」についても検討している。分庁舎が無くなるということやまちづくりの中にどのようにいかしていくのか、これまでまちづくりの主体であった我々世代ではなく次の世代が何を望むのか等、若い市民の意見を聞きながら検討を進めている。

2.2 南砺市の課題 ～人口問題と急激な少子化 長寿化～

- 国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、このまま何も手を打たなかった場合、南砺市の人口は2060年には現在の人口の約4割である23,000人程度まで減少すると予想されているが、自然増・社会増の双方から対策を講じ、出生率向上、健康寿命の延伸、若年層の転出抑制・転入促進等により、30,000人を維持することを目指している。
- また、市外にお住まいの方で、南砺市を想い、集い、地域課題の解決に協力いただける「応援市民」を、2060年までに5000人認定することを目標としている。
- 人口減少下で進展する高齢化率の上昇も問題である。85歳以上の人口ひとりに対する15～64歳の生産人口は、1995年に30人弱であったが、2015年に7人程度、2035年には3.4人程度まで下落すると見られている。そのため、今後のまちづくりにおいては85歳以上の方々の暮らしを考慮していくことが課題となる。

2.3 財政状況 ～行財政改革～

- 合併特例債の発行と地方交付税の優遇措置は平成32年までのため、対策を講じなければ平成33年には歳出が歳入を上回る見込みである。そのため、公共施設の再編や各種事業・補助金制度の見直しにスピード感を持って取り組んでいく必要がある。
- 平成17年と平成27年の財政を比較すると、人員削減により職員給与が3割近く減少した一方で扶助費が膨れ上がり、歳出は大きく変動していない。

- 今後も高齢化の進展等により扶助費は雪だるま式に増えていく可能性があるため、そこを考慮した財政運営が必要であり、行財政改革の更なる深掘りに取り組んでいく。

2.4 公共施設再編 ～合併による2倍の公共施設がある～

- 南砺市は保有する公共施設のストックが多く、人口あたりの総延床面積が県内他自治体と比較して突出して広い。
- 保有する全ての施設を今後も同じ規模で維持管理し、建替えまで行おうとすると、過去の投資的経費と比べ毎年約 32 億円の不足が見込まれるため、公共施設の再編は急務であり、長期的には30年間で公共施設面積を半分程度まで縮減する計画である。計画通り進んだ場合、30年間で約 14 億円の黒字が見込まれる。

2.5 消滅するまち ～増田レポートショックから 地方創生～

- 平成 27 年に、今後5年間の目標や施策の基本的方向及び具体的な施策をまとめた「南砺幸せなまちづくり創生総合戦略」を策定した。同時期に南砺市の地域再生計画が内閣総理大臣の認定を受けたこともあり、スタートダッシュに成功して多くの成果を挙げてきた。
- 移住定住、空き家対策、婚活支援は、市内のショッピングセンター内に設置した「南砺で暮らしません課」で推進している。
- 特に移住定住に注力しており、民間賃貸住宅に居住した場合の家賃補助、住宅用地や住宅を購入又は建築された場合の奨励金交付、三世同居助成等、様々な施策で移住希望者をサポートしている。
- また、移住定住を希望する方に南砺市の生活を体験していただくことを目的に、1名1泊1,000円で最大30泊まで利用可能な「なんとに住んでみられ」住宅を用意している。一か月間住み続けることで地域住民と仲良くなり、実際に移住してきた人も増えてきている。
- 移住の検討にあたり、土砂崩れや台風などの災害を心配する方もいるが、南砺市は災害リスクの少ない立地環境であることを説明し、安心していただいている。雇用に関しては、求人倍率が高く仕事はたくさんあるものの、希望職種とのマッチングの観点で課題はある。
- 移住者の中には、耕作放棄地を無償で借り受けて無農薬で農業をしたいという方も増えており、山間地で一時期増加していた耕作放棄地が現在は横這いで推移するといった効果も見られている。
- 空き家対策としては、「空き家バンク」ウェブサイトで空き家のマッチング事業を行っており、空き家の古民家をゲストハウスに改修して外国人旅行客を呼び込むといった斬新なコンセプトのビジネスモデルが生まれてきている。例えば、古民家を地元の職人と交流できるゲストハウスとして改修した「BED AND CRAFT」は、宿泊しながら

- ら職人とのづくり体験ができる新しい試みの宿泊施設としてグッドデザイン賞を受賞し、全国的なモデルとなっている。
- 南砺市では、旅行者にできる限り「町屋」の宿へ宿泊して欲しいと考えおり、最近では Airbnb との連携により海外からゲストハウスへの宿泊客が増えている。食事が出ない宿が多いため、周辺の食堂や居酒屋等に多くの外国人が訪れるといった新たな風が吹き始めている。
 - 世界文化遺産に登録されている「相倉合掌造り集落」では、「世界遺産に住まんまい家(け)プロジェクト」として空き家への移住者を全国から募集したところ 54 組もの応募があった。同集落は一時期、中学生が一人しかいない程にまで過疎化が進んだが、最近では移住が移住を呼ぶ好循環が生まれ子供たちが増えてきている。人が住む世界遺産のため存続が非常に難しいが、こうした好事例が生まれたことを非常に嬉しく感じている。その他、同集落では、空き家に「金沢大学五箇山セミナーハウス」を設置し、教育・研究・社会貢献活動などに活用している。
 - 市全域の一体的な発展を目指すため、「山間過疎地域振興条例」を定め、山間過疎地域の振興や支援事業にも取り組んでいる。例えば人不足が課題となっている自治会等が実施する草刈り作業に市職員で組織した草刈り作業応援隊を派遣しているが、その動きに連動して各地域の若者が集まるといった動きも生まれてきている。
 - それ以外にも、ランサーズ(株)と連携し、移住ニーズの高いフリーランスに南砺市で働く魅力を情報発信する「さすらいワークin南砺プロジェクト」や、(株)グルーヴス・南砺市商工会との連携により、都市部で働く優秀な人材と地域の中小企業の副業マッチングを図る「南砺市『副業』応援市民プロジェクト」などに取り組んでいる。
 - こうした取組の成果が実り、宝島社『田舎暮らしの本』2017 年2月号「2017 年版住みたい田舎ベストランキング」の総合部門で全国第3位、同社『田舎暮らしの本』2018 年2月号「2018 年版 住みたい田舎ベストランキング」の人口 10 万人未満の小さなまちランキング総合部門で全国4位、新潟を含めた北陸地区では1位を獲得している。
 - 婚活支援にも力を入れており、平成 23 年度に着手した結婚活動支援事業「あなたと私を結ぶ赤い糸プロジェクト“AIP48 プロジェクト”」を通じて、これまで 105 組が成婚している。
 - 子供・教育に重点的に予算を使いたいと考えている。子育て支援としては、妊娠、出産、子育てまで切れ目なく支援する「南砺市型『ネウボラ』推進事業」を推進している。教育面では、人口減少により小規模学級化が進む地域における教育手法を再構築するため、文部科学省委託事業「人口減少社会における ICT の活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」として、複数校を ICT で繋いだ遠隔協働学習に取り組んでいる。

2.6 南砺型地域包括ケアシステム ～医師不足から～

- 平成 28 年に南砺市の医療・介護・福祉の総合的な窓口として「地域包括ケアセンター」を設置した。また、人材不足の解消に向けて人材育成を行ったところ 24 時間巡回型訪問看護・介護が可能となった。
- 老後を、住み慣れた地域で在宅で過ごし、最後は自宅で看取れる、ということをメッセージとして送り続けてきた結果、近年は総合診療医を目指す初期研修医・後期研修医が増加している。
- また、まちづくりにあたり「幸せに生涯を過ごせる協働のまちづくり」「一人暮らしの認知症の方が笑顔で暮らせるまちづくり」といった、地域包括の福祉面から見た 5 つの規範を制定している。施設と共助・公助の仕組みがある程度出来てきたため、今後は住民自身の自助に力を入れていきたい。

2.7 小規模多機能自治へ ～新たな住民自治のあり方～

- 本来「地方自治」とは、地方公共団体が行う「団体自治」と、住民主体で行う「住民自治」が車の両輪となって機能するものである。
- 戦後、区長や自治振興会長が中心となり、校区単位で運動会、祭り、公民館活動などの住民自治が行われてきたが、経済成長等の社会変化とともに、いつの間にか住民がお客さんとなり団体自治に依存的になってしまった。急激な人口減少、少子高齢化で様々な課題が表面化している現状において、住民自治のあり方をもう一度皆で考えようということで「小規模多機能自治」の体制整備に取り組んでいる。
- 小規模多機能自治とは、旧小学校単位程の小規模で、地域の課題解決に結びつく多面的な活動を地域の団体、企業、住民等が一体となって行う仕組みであり、平成 31 年に市内 31 地区で小規模多機能自治を構築するため、各地域の住民との意見交換を進めている。

2.8 エコビレッジ構想 ～SDGs へ～

- 自然との共生による地域資源をいかした持続可能な循環型社会の構築を目指し、平成 25 年に「南砺市エコビレッジ構想」を策定した。
- 南砺市には、全国チェーンのレストラン等はない。それでも、地域で獲得した所得の多くが域外に流出している状況であり、こうした状況を食い止めるため様々な取組を行っている。
- 特に、南砺市が豊富に有する森林資源については、建築資材等に適さない低質材や端材等を民間のペレット工場でペレットに加工し、公共施設等に導入したペレットボイラーで燃料として用いることで、地域内で資金が循環する仕組みを構築している。

- その他にも、高校生向けの環境学習、林業の担い手を育成する「森の大学校」構想の策定、小水力発電事業、住宅用太陽光発電設備・木質ペレットストーブ等設置補助等、エコビレッジの実現に向けた取組を推進している。

2.9 南砺幸せ未来基金の設立に向けて

- 行政の補助金に頼るのではなく、市民や事業者・法人から、寄付金、遺贈、投資信託、クラウドファンディングなど幅広い手法で資金調達を行い、豊かな自然や産業、文化を次世代に繋げるための市民活動を支援する「南砺幸せ未来基金」の設立に向けて取り組んでいる。市は資金援助をしておらず事務局だけを務めている。
- 基金の設立や運営を通じて資金を集めるだけでなく、志の高い市民が地域作りにも参画することで、人と金、一石二鳥の効果が生まれている。

2.10 農村文明創生日本塾の立ち上げ

- 農山漁村の暮らしや文化を見つめ直す「農村文明創生日本塾」の代表理事を務めている。
- 都市化とグローバル経済化が進展する中、農地があり、山があり、海があるといった「農山漁村」の大切さを再認識し、農山漁村に根ざした個性豊かで多様な文化や暮らしの持続と発展を目指すとともに、都市との共生や世代間の共生など、様々な共生社会を作っていきたい。

2.11 その他 文化政策 アニメ ほか

- 南砺市は平成 22 年度に文化庁より、文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に領域横断的に活用し、地域課題の解決に取り組む地方自治体として「文化芸術創造都市」に認定された。
- アニメによるまちづくりにも力を入れている。市内の会社が、南砺市を舞台のモデルとしたアニメを制作したところ、舞台となった場所に全国から多くのアニメファンが訪れ、南砺市は「アニメの聖地」として有名となっている。
- スタジオや劇場、コワーキングスペース等の施設を有する「南砺市クリエイタープラザ」を設置したところ、アニメなど情報コンテンツ産業を中心とするクリエイターやデザイナーが多く集まってきている。今後も、インターネットが繋がれば仕事ができるようなクリエイティブな仕事の人を多く呼び込んでいきたい。